

- HANSEN, A.: Mitth. aus d. Zool. St. z. Neap., 11, 1893.  
 HANSTEEN, B.: Jahrb. f. wiss. Bot., 24, 1892.  
 HUNGER, F. W.: *ibid.*, 38, 1902.  
 KYLIN, H.: Arch. f. Bot., 11, 1912.  
 ———: Z. f. phys. Chem., 83, 1913.  
 ———: Ber. d. deut. bot. Ges., 36, 1918.  
 ———: Kungl. Fys. Säll. Lund. Förh., 8, 1938.  
 MANGENOT, G.: C. R., 172, 1926.  
 SAUVAGEAU, C.: *ibid.*, 162, 1916.  
 YENDO, K.: Ann. of Bot., 23, 1909.  
 安藤芳明: 植物学雑誌, 64, 1951.  
 ———: 医学と生物学, 37, 1955.

## 海龜の甲の上に見出された *Gelidiella ramellosa*

一木明子

M. ICHIKI: *Gelidiella ramellosa* found on  
the carapace of a sea turtle

藻類は岩の上ばかりでなく、動物の体の上にも生えることは周知のとおりである。たとえば軟体動物の貝殻の上などには普通に見出され、よく記載されている。ところが亀の甲ということになると、ずつと珍しいことになりあまり記載もない。有名な例としては、淡水産の *Basycladia* がクサガメの甲に着生して、いわゆる蓑亀の尾を形成していることが記述されている。

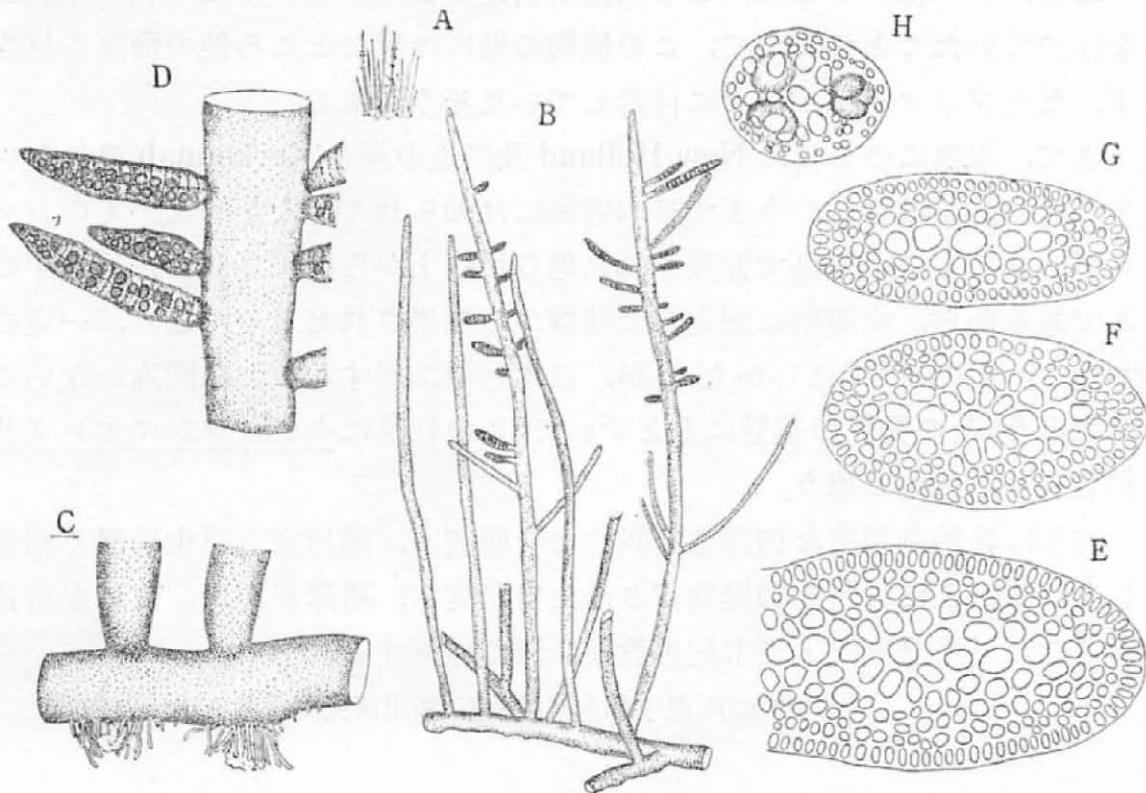
ここに報告するシマテングサの一種は、アカウミガメの甲に見出された場合である。調べた結果、*Gelidiella ramellosa* (KÜTZING) FELDMANN et HAMEL にあててさしつかえないと思われたので、ここに報告する。

この紅藻は対島の佐須奈で九大・農・水産学教室の道津喜衛氏によつて、1954年12月採取されたもので亀の甲の上にじゆうたん状にすきまなく密生していたのを、メスでけずりとつて持ち帰つたものである。亀はかなり大きいもので甲長が60~70 cm 位のものだつたそうで、ブリの落とし網の二重落とし部に入りこんでいたという。この紅藻の色は黒ずんだ赤褐色であつたので、材料の提供を受けた時は紅藻の感じは全くうけなかつた。

下部は匍匐枝になつていて盛んに分岐し、所々から仮根の束が出て亀の甲に付着している (Fig. C)。この匍匐枝から直立の枝がたくさん密生している。直立枝は扁圧で単条のものが多く、高さ3~15 mm 位でかなり変化があり、時に少しばかり枝分れする。枝は鋭角に出ている (Fig. A, B)。

断面を作つて見るとかなり明瞭に一系列の細胞からなる中軸系が見られる (Fig. E-G)。この中軸系の細胞は成長して太つた部分でも明らかに認められる。この中軸から細胞系が周囲に向つて作られ、順次に細かい細胞になつて皮層が作られる。細胞の大きさは中心に近い所は、径7~15  $\mu$ 、表皮のは5~10  $\mu$  位まであり、何れも多少角ばつている。この中軸の先端の頂細胞は顕微鏡下にそのままで見ることが出来る。

生殖細胞としては四分孢子嚢だけが見られた。stichidia を作つており短い枝状をして直立枝にほぼ直角に付着している (Fig. B, D)。多数の stichidia



*Gelidiella ramellosa* (KÜTZING) FELDMANN et HAMEL

A, B. Frond. (A,  $\times 1$ ) (B,  $\times 8$ ).

C. Basal portion of the frond. ( $\times 48$ ).

D. Stichidia. ( $\times 48$ ).

E, F, G. Cross section of the frond. ( $\times 190$ ).

H. Cross section of the stichidia. ( $\times 190$ ).

が着生して羽状になつている場合も見出された。stichidia の下部は特にくびれている (Fig. D)。直立部の先端には stichidia は見出されなかつた。その内部構造を横断面で見ると図に示すように皮層の発達が悪く、細胞と細胞の間がゆるく結合している。また中軸細胞から数えて三番目の細胞が始原細胞になるらしい。従つて一つの面に四つ位の四分胞子嚢を見ることが出来る。四分胞子は十字様に分れている (Fig. H)。

この種類は体の構造その他から考えてシマテングサ属と思われ、その外形、高さ、小枝の分岐状態などから考えて *Gelidiella ramellosa* とと思われる。KÜTZING (1843, 1868), FELDMANN-HAMEL (1936) などの記載や図と大体一致する。ただ気がかりなのは、FELDMANN-HAMEL によれば、直立枝にもその先端に stichidia が作られるように書かれてあるが、KÜTZING によればそのような図示がなく、それ程重要な性質ではないと思われる。

なお、興味深いことは、この紅藻が前述のようにじゆうたん状の単純群落を作つていたことであつて、この植物の他には見たところ他の海藻も見当らず、ただフジツボ類が所々に付着していたそうである。

さて、本種については New Holland 及び地中海の Kerkennah 島においてその分布が記載され、今まで日本近海には知られていなかつた。そのシマテングサ属のものが対島で捕獲された亀の甲の上から採集された。亀の甲のことであるから、或場所に固定した基盤から採集されたものでなく、一定の locality を示すわけにはいかないが、日本近海に産することは間違いないことであろう。その発見の基盤にもとずいて、この紅藻に キツコウシマテングサ の和名を与えたいと思う。

終りに終始御懇篤な御指導を賜つた当研究室、瀬川宗吉博士に厚く感謝申し上げます。また材料を御提供下さつた当研究室、道津喜衛氏、文献を御貸し下さつた三重県立大・瀬木紀男教授に深く感謝する。

(九州大学 農学部水産学教室 瀬川研究室, 私立筑紫女学園)

### Summary

*Gelidiella ramellosa* (KÜTZING) FELDMANN et HAMEL was found forming a thick carpet on the carapace of a sea turtle captured at Sasuna, Tsushima, Japan.

## 引用文献

1. KÜTZING, F. T. (1843): *Phycologia Generalis*. LEIPZIG.
2. ————— (1868): *Tabulae Phycologiae*. Band 18. NORDHAUSEN.
3. FELDMANN, J. et HAMEL, G. (1936): *Floridées de France*, VII, Gélidiales. *Rev. Algol.*, 9 (1): 209-264.
4. 朝比奈泰彦 (1939): *隠花植物図鑑*. 東京.
5. SMITH, G. M. (1950): *The Fresh Water Algae of the United States*. New York.

## 千葉県大原産の一珍藻

オホノアナメ (*Agarum oharaense*  
YAM. sp. n.) に就いて

山田幸男

先般千葉県大原町の漁業組合専務理事大野磯吉氏から久し振りに同地先にて採集された多数の海藻標本の送附を受けたが、其の内に誠に珍しい一褐藻が見られた。それは明らかにアナメ属 (*Agarum*) の一種で已に同氏もその手紙に述べていられる様に今迄本邦に知られたものとは明らかに異なつたもので特にその茎の状態は我邦北部に産するアナメ (*A. cribrosum* BORY) とは全然異なり明らかに扁平でその両縁からは屢々根状の附属物が多少共発出している。此の標本は何れも暴風後等に大原町地先の海岸に打揚げられたものでその生育深度は不明であつた。由来大原という処は以前から興味ある海藻の産地として知られており、筆者も学生時代から故岡村先生の御言葉に従つて屢々その地を訪れた。当時巢鴨・渋谷等に住んでいた筆者は、割引の一番の市電にのつて両国へ行き出来る丈け早い汽車にのつて大原へ行き採集をして夕方帰京したが、可成に変つたものをとる事が出来た。ハスチギヌ (*Nienburgia japonica* (YAM.) KYLIN) カヘルデグサ (*Binghamiella californica* (FARLOW) SETCHELL et DAWSON) 等も初めて同地に於いて採取したものである。その後多数の海藻採集者が同地を訪れたにも係らず此の *Agarum* は誰も報告していない。従つてこれは余り浅所には生育しないもので比較的稀なものではないかという想像がつく。然るに此度上記の如く大野磯吉氏により